

「蜷川氏」って、誰だ

——「小野蘭山愛蔵石類」調査補遺——

はじめに

筆者は昨年夏、本学博物館の山下学芸員、山口研究員と一緒に、武田科学振興財団杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」の調査を実施した。小野蘭山（一七二九—一八一〇年）は、江戸時代における本草学の第一人者であるが、植物だけでなく考古遺物も収集していたことを明らかにした。詳細は本誌前号に掲載した報告を参照されたいが（徳田他 二〇二三）、その中で「今後の課題」として先送りしたことがある。本稿ではその課題について、現在の調査状況を報告しておきたい。

さて、その課題とは次のとおりである。「小野蘭山愛蔵石類」に収蔵されている石斧（個体番号 No.15）の一点に、「蜷川氏□贈」との朱書きが認められた。「□贈」は状況から考えて「寄贈」と判断してもよいが、それでは「蜷川氏」とは誰かという問題である。写真でも明らかなように、朱書きは摩耗によって判読し難い状況にあり（写真1）、この釈文が正しいか否かについても不安がないわけではない。すなわち後考に期するとした「課題」とは、この「蜷川氏」が誰かということである。すなわち

徳田 誠志



写真1 石斧（個体番号 No.15）

小野蘭山に石斧を寄贈するような立場にあつて、「蜷川氏」に該当する人物が存在していれば、朱書きの釈文の妥当性が高まることになる。さらに言えば古器物研究において「蜷川」といえば、誰もが明治初期の「壬申検査」を主導した「蜷川式胤」を思い浮かべるであろう。しかしながら朱書きにある「蜷川氏」が「式胤」であれば、小野蘭山とは活動時期

が異なり、今回調査した「小野蘭山愛蔵石類」の成立過程自体から再検討を余儀なくされる。その一方で、小野蘭山と同時期に活動した人物の中に「蜷川氏」を見出すことができれば、この「石類」が間違いなく蘭山の手元にあった可能性が高くなり、この資料の来歴を補強することができる。

このように「蜷川氏」の特定については、この資料の根幹にもかかわる問題であって、先の報告を脱稿した後もずっと気にかかっていた。そのため『紀要』刊行後に、報告文の抜刷りを作成し、研究者仲間に広く意見を求めた。その結果、東京大学史料編纂所の藤原重雄先生から、「蜷川氏」に該当する可能性がある人物として「蜷川親常」を教えていただいた。よって今回は、藤原先生からご教示頂いた史料を紹介しながら、「蜷川氏」の同定を進めていきたい。さらには18世紀後半における、旗本階級に拡がっていた好古への興味や、彼らの情報伝達状況なども見ていくこととしたい。

1. 蜷川親常について

本項では「蜷川親常（以下、親常と記述する。）」について、彼の生年や氏素性などの履歴をこれまでに確認できた情報によって見ていくこととしよう。そして小野蘭山との接点があるか否かを確認していきたい。

親常の履歴については、『寛政重修諸家譜』において明らかにできる（中塚 一九一八）。『寛政重修諸家譜』は、寛政年間に江戸幕府が編修した大名や旗本の家譜集であり、文化九（一八一二）年に完成している。

この記録によると親常は寛政二（一七九〇）年に御小姓組の番士となる。この時二三歳と記されていることから、生年は明和五（一七六八）年になるう。その後、寛政九（一七九七）年には従五位下大和守に叙任している。『寛政重修諸家譜』の記録はここまでであるが、その後も順調に出世し、文化一二（一八一五）年に新番頭の役職に就く。文政一〇（一八二七）年に先代親文の死去に伴い家督を相続した後も、天保七（一八三六）年に小姓番頭、同一〇年には書院番頭となる。さらに弘化元（一八四四）年には、御留守居役に任じられている。その後、安政元（一八五四）年に八六歳で隠居する（小川 一九九八）。

このように親常は親文の時代に五〇〇〇石に増えられて以来、大身旗本であり幕閣の中核として江戸幕府に仕えてきた人物である。『寛政重修諸家譜』によれば、家祖は建久八（一一九七）年に没した親直であり、源頼朝の旗揚げに加わった人物とされている。さらに室町時代には、伊勢氏と結んで政所代を務めた。この時代の当主であった親常はテレビアニメ「一休さん」において、足利義満の側近として登場する「蜷川新右衛門」のモデルといわれている。その後、親長の時に徳川家康の御伽集として仕え、江戸幕府開府後は旗本として幕末に至る。後嗣には、大正時代から戦後にかけて国際法学者として活躍する「蜷川新」がいる。以上の通り親常は武家の名門一族の当主であり、江戸幕府の中核で活躍した人物である。この幕閣としての活動には言及しないが、大身の旗本として着実な出世を果たし、子の親寶へ家督を譲り、長寿を全うしたことが確認できる。

さて、この親常が「石斧」に記載された「蜷川氏」であるか否かを、さら

に小野蘭山との接点があるか否かを考えていきたい。親常は、明和五（一七六八）年の生まれと考えられる。一方、蘭山は享保一四（一七二九）年に誕生し、文化七（一八一〇）年に江戸で逝去する。江戸に居住した期間としては、寛政一一（一七九九）年に江戸幕府に医官として召し出されてから、亡くなるまでの約一〇年間ということになる。すなわち親常が三〇歳を少し超えて大和守に任じられ、中興小姓として若手幕閣として頭角を現してきた時期に、小野蘭山が江戸に下向し幕府の医官として江戸に住居を構えていたことになる。すなわち二人は同時期に江戸に居住しており、江戸幕府に仕えていた。しかし一方は幕府から請われて任官した本草学の大家であり、このとき七〇歳を超えている人物であつて、方や若き大身旗本である親常との間に職務上で接点があるかといえは、残念ながら二人の交流を示す史資料は見いだせていない。但し、蘭山が江戸に下向し幕府に任官したことは、幕府内では大きな話題ではあつたろうとの予想はできる。

このように親常の幕閣としての顔だけでは、小野蘭山との接点は見えてこない。すなわち親常が興味を持っていた好古の世界を紐解いていくと、本草学の第一人者である小野蘭山とどこかで交流を持つ状況を考えることもできる。よって、ひとまずは石斧の朱書きの釈文は「蜷川氏」であると判断し、そしてその「蜷川氏」とは「蜷川親常」であると考えて、以下論述を進めていきたい。

二. 親常の好古活動 — 近藤重蔵との交流 —

本項では、親常の好古活動を見ていきたい。その前に親常が小野蘭山に寄贈したと考えられる石斧について、先の調査結果を再録しておく（図1）。石斧は緑色玉質のネフライト製であり、全長四・八cmを測る。いわゆる撥形定角式形磨製石斧であるが、中央に小孔が穿たれている。すなわち本物であれば石斧の中央に孔など設けるはずもなく、この個体は江戸時代に製作された模作品であると判断した。杏雨書屋に残されている「小野蘭山愛蔵石類」において調査した一五点の磨製石斧のうち、一〇点が江戸時代に製作された模作品であると判断しているが、この状況を考えると江戸市中には多数の模作品が流通していたことが窺える。この模

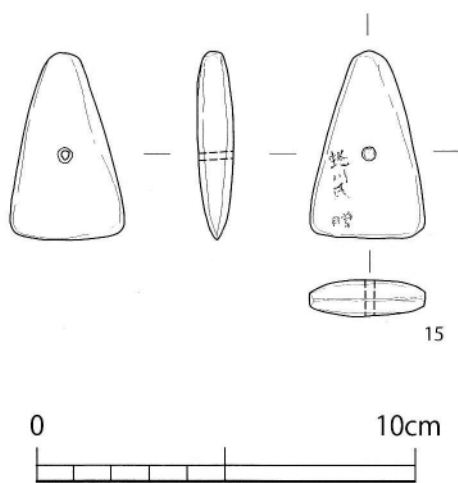


図1 石斧「蜷川氏□贈」

作品については改めて考察していくこととしたいが、親常は何らかの方法によって、例えば奇石商からの購入という方法が最も可能性が高いが、この石斧を入手したとしておきたい。

さて、この親常は先述したように大身旗本であり、けして本草家でも物産家でもない。それゆえなぜこのような石斧を所持していたのか、そして蘭山に寄贈する可能性があったのかを考えていく必要がある。この疑問を解くカギは大身旗本として活躍するいわば「表の顔」ではなく、親常の「好古家」としての姿を明らかにしていかなければならない。そこで藤原先生からご教示を受けた二点の資料を見ていくこととしよう。

一つ目の資料は、東京大学史料編纂所が所蔵する『近藤重蔵関係資料4-2』に収められている『古物図』である(図2)。この『古物図』は一六紙を貼り継いだ卷子本であり、天地二八cm、長さ五八・五cmを測る。但し、この『古物図』の来歴は不明であり、この形に装丁された時期も不明である。この卷子本の巻首に、「蜷川親常珍藏」として三個の須恵器が描かれている。右端には須恵器の「甕」が描かれており、胴部に「九寸五分」と記されている。注記には「曲玉壺 出所不知」とあり、さらに「或云行基焼トテ行基菩薩ノ作ト云為去行基ナドヨリハ以前ノモノト見ユ實ニ神代ノ器トモイフヘキモノ也」との説明書きがある。この説明書きは近藤自身が記したもののか、絵図と共に何かを写したものは定かではない。左上には「口ヨリ内ニ如此キ文ヤウアリ」として、須恵器に通常認められる同心円状の「当具痕」を描くなど、表面の「叩き痕」とともによく観察して描いていることが分かる。中央には短頸壺が描かれており、「駿州ヨリ堀リタス」と記してある。全長が「五寸ホト」であ



図2 『古物図』所収「蜷川親常所蔵須恵器」(東京大学史料編纂所所蔵)

り、口径は「三寸」である。他の二点に比べやや茶色に描かれているところを見ると、須恵器ではなく土師器の短頸壺であるかも知れない。左端は須恵器の提瓶であり、「備中ノ国ヨリ堀イタス」とある。ほぼ中央に「九寸」と記される。この絵図は外面のカキ目痕や肩部の双耳など提瓶の特徴をよく描いており、双耳の形状から判断すると六世紀後半の所産であろう。この三点は出土地もバラバラであり、所属時期も異なることから親常が偶然に収集した結果と考えられる。親常が須恵器を収集していたことは、後述する大田南畝が残した『群芳社賞奇』にも、革袋形の須恵器と思われる図が掲載されている。この須恵器の所蔵者は「蜷川氏」と記載されており、大田南畝との交流から考えてこの「蜷川氏」が「親常」であることは間違いなく、親常が古物収集の一環として多くの須恵器を集めていた様子が窺える。もう一つの史料は、親常から近藤重蔵へ宛てた書簡である（写真2）。差出年は不明であるが、月日は「十二月十日」とある。この書状には親常が、「石」にも興味を抱いていたことを窺わせる記述が認められる。その一つとして近藤重蔵へ「石箱」二つをお返しするという内容であり、さらに「奇石と鈴」を見たという記述もある。「石箱」が具体的にどのようなものを指すかはわからないが、この時代の本草学や好古の収集熱が高まっていたことを考えると、杏雨書屋が所蔵している「小野蘭山愛蔵石類」のような標本箱を想定することも可能であろう。さらに「奇石」を見たという記述から考えて、親常が珍しい石への関心があったことも窺える。すなわち、親常が好古の収集品として「石斧」を所持していても全く不思議ではないことが指摘できる。さらに追伸のところで、重蔵が「舍利石」をたくさん持っているように

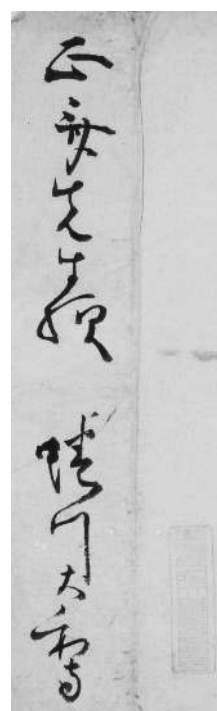
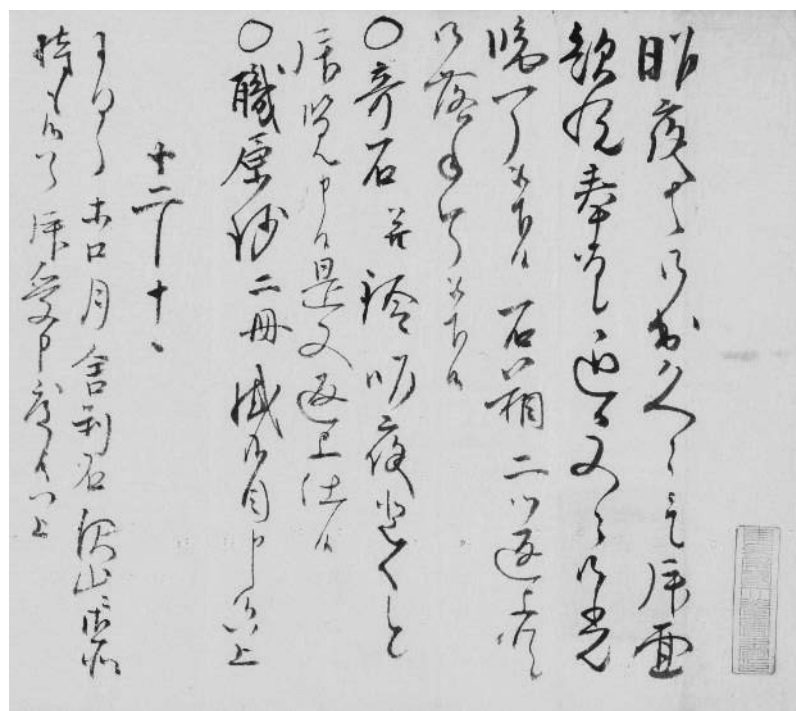


写真2 「蜷川親常」書状（東京大学史料編纂所所蔵）

あれば少し分けてほしいとのお願いもしている。この時代に「舍利石」と呼称されている石とは何かであるが、木内石亭の著した『雲根石』後編卷一「光彩類」の項目に「舍利石」が取り上げられている（中川 一九三六）。その記述では「奥州津軽外濱邊にあり。大さ小豆の如くにして圓、透て黄赤白或は交り、或は一色、光明ありて甚美なり」と記されているものと考えて良い。この現在の青森県外ヶ浜町で採集される「舍利石」を近藤重蔵が多数所持していることは、蝦夷地探検の際に当然この地を通過するものであり、その際に手に入れたものとも考えられる。そうなればこの書簡は、近藤重蔵が蝦夷地探検家として名声を得た後の時期に親常から発信されたものとも考えることもできよう。

さて、東京大学史料編纂所の藤原先生からご教示をいただいた史料によつて、蛭川親常が「好古」に関心があり須恵器などの古物を収集していたこと、さらに近藤重蔵との書簡において「奇石」という本草学の分野にも興味を持っていたことを明らかにした。それゆえ、石斧を所蔵していたことも首肯できるし、本草学の大家である小野蘭山ともつながりがあり、それゆえ石斧を寄贈する関係があったことも想定が可能になる。このように親常の「好古家」としての顔は、大身旗本としては全く見えてこない姿であり、職務を離れた活動においてのみ見られるいわば「裏の顔」である。もちろん裏の顔といっても悪事を働くものではなく、いわば趣味や、個人的な好奇心の世界であり、今日でいってみればアフターファイブにサラリーマンが全く別の顔で活躍する姿と似ている。そしてまた公務ではないからこそ、親常のように五〇〇〇石の大身旗本と、近藤重蔵という旗本といっても家禄は一〇〇俵であり、役高・足高を足

しても三〇〇俵そこそこの下級旗本が親しく交流できるといえる。すなわち「裏の顔」は身分を超えた交流であり、このことはこの時期の好古や物産学を考える上で重要な視点であろう。

そこであらためて近藤重蔵について、彼の履歴と好古家としての姿を見ていきたい。近藤重蔵は明和八（一七七二）年に生まれており、諱は「守重」、号は「正齋」である。家柄は御先祖組与力を代々務める家系であり、お目見え以下の御家人である。御家人といっても家禄は一〇〇俵であり、軽輩の小役人といえる。太平の江戸時代にあつてはこの下級役人として生涯を終え、惣領息子へ無事に継職することが最大の目的である人生を送ることが半ば定められていた身分であるといえよう。しかしながら重蔵がこの境遇から抜け出したきっかけは、彼の身に付けた秀才といつて過言ではない。重蔵は儒者の山本北山（一七五二―一八一二年）に師事し、早くも一七歳の時には「白山義学」という私塾を設立している（谷本 二〇一四）。さらに重蔵は寛政六（一七九四）年二月に実施された第二回の学問吟味により丙科及第という合格判定を得る。この学問吟味とは寛政の改革の一環として幕府が創設した制度であり、優秀な人材登用のための試験といつてよい。重蔵が合格した第二回の学問吟味において、後述する大田南畝も甲科及第となっている。おそらく重蔵と南畝の交流も、この学問吟味が一つのきっかけになったものと思われる。

学問吟味に合格して重蔵の境遇は大きく変わることになり、まず合格の翌年に長崎奉行手附出役を命じられる。この時の長崎奉行は学問吟味の試験監督でもあった中川忠英（一七五三―一八三〇年）であり、この

中川の異動とともに蝦夷地の探検に関わることになる。そして寛政一〇（一七九八）年から文化四（一八〇七）年までの約一〇年間にわたり、江戸幕府の対蝦夷地政策の中核として活躍する。一般の歴史書では重蔵は蝦夷地探検家としての活躍が記されることが多いが、本稿ではあえて触れずにおく。重蔵の好古家としての活動が表面化してくる時期としては、蝦夷地探検という役職から離れ文化五（一八〇八）年に書物奉行に転役してからのこととなる。但し重蔵としては家禄も上がらず、また閑職とされる書物奉行に不満があったとされているが、彼の学才によって紅葉山文庫の書物を縦横無尽に活用し、『右文故事』『好書故事』等の紅葉山文庫の解題や来歴を考証する成果を上げる。

さらに重蔵は蠣殻町（現在の日本橋人形町）にあった拝領屋敷内に「擁書城」と名付けた書斎を構え、そこには蝦夷地から持ち帰ったものを含め、様々な古器物（その中には勾玉も含む）を所蔵し、ある種博物館の様相を呈していたと伝えられる（谷本 二〇一四）。そして「花月社」と称した古物会を開催し、その出品者には屋代弘賢・狩谷掖斎等の江戸を代表する文人が参加し、大田南畝も加わっている。先に示した『群芳社賞奇』も文化七（一八一〇）年に重蔵が主催して開催された古器物鑑賞会の記録であり、そこには杉田玄白・市川寛斎らが出品している^①。この時に親常が出品したものが、「大和国大三輪寺」から出土した革袋形須恵器であった。すなわち重蔵が中心となり、江戸の文人を取りまとめたような立場から観賞会を企画・開催したといえる。

このように重蔵は学問的興味が優先したようであり、そのため幕府の役人としての矩をこえるような振る舞いもあったようである。南畝から

は「ヨフトホエル（酔うと吠える）」というロシア語なまりのようなあだ名をつけられるように、家禄が上がらないこと、そして自分の能力が高く評価されないことに不平不満があったようであり、傍若無人の振る舞いも多かったようである。そのためか文政二（一八一九）年には、大坂御弓奉行という閑職に転役となり、江戸を離れることになる。大坂へ行って彼の振る舞いが正されることはなかったようであり、大塩平八郎など大坂の文人との交友に忙しかったようである。そのためか二年足らずで江戸に召還となり、永々小普請入（非役）となり無役を仰せ付けられる。そのため蠣殻町の拝領屋敷も召し上げとなり、「擁書城」の蔵書と共に王子滝野川に移り住む。その後文政九（一八二六）年には、息子富蔵の起こした刃傷事件に連座し改易となり、近江国高島郡大溝藩にお預けとなる。その三年後、同地で没する。享年五九歳であった。

重蔵の幕府役人としての履歴はともかく、江戸市中において好古や古器物の世界における大きな顔役であったことは間違いない。彼が残念な生涯を閉じたことも影響してか、この分野においては南畝のように多くの史資料が残されていない。その数少ない一つが、現在早稲田大学図書館が所蔵する『尚古圖録』であろう^②。さらに重蔵の好古家としての活動については、清野謙次が「新井白石と近藤正齊（日本考古学人類学史の研究）」とした論文を発表している（清野 一九四一）。いずれにせよ「擁書城」に集められた書物や古器物は当時の研究状況を物語る文物であり、彼の書斎は多くの文人が集ったサロンであったことは間違いない。その一人に五〇〇〇石の大身旗本の親常もいたのであろう。そしてこの時代の好古や古器物についての活動は決して表の活動ではないにせよ、旗本

階級の武士を含め江戸の文人たちに拡がる好奇心の世界に大きく根を張っていることに注目しておきたい。

三、親常と大田南畝 — 旗本階級の好古活動 —

前項では親常と近藤重蔵の交流を通して、彼の好古活動を見てきた。本項では親常の好古活動を記録したもう一人の人物である大田南畝を通して、親常の好古への関心を解き明かしていきたい。さらに重蔵や南畝といった旗本階級の好古への関心を見ていくこととしよう。

大田南畝といえは歴史の教科書などでは狂歌師としての評価が高いが、これは彼の一面を示しているに過ぎない。そこでまずは南畝の履歴を見ていくこととする。南畝は寛延二（一七四九）年に江戸牛込仲御徒士町に生まれる。住所が示す通り生家は徒を勤める御家人であり、俸禄七〇俵の下級幕臣である。南畝の曾祖父の代から御目見以下であり、出世を望むべくもなく、むしろ家督を繋ぐことが大切なことであって、南畝も明和二（一七六五）年に数えの一七歳で徒となる。通常であればこのまま徒として軽輩小役人として生涯を終えるのであろうが、南畝には優れた学才が備わっていた。幼いころから学問を好んだとされ、漢学者松崎観海（一七二五―一七七六年）に師事する。そしてまず彼の能力は狂歌の世界で花ひらき、安永年間から天明にかけて江戸における文壇の指導者的な地位を占める。しかしながら松平定信の寛政の改革が始まり、文壇への取り締まりが厳しくなると南畝は狂歌の活動から身を引く。そのきっかけが「世の中に蚊ほどうるさきものはなし ぶんぶといふて夜も寝

られず」という狂歌が南畝の作ではないかと疑われたこととされる。本人は否定するものの、下級とはいえ幕臣がご政道を批判する嫌疑を掛けられたことは、南畝にとってはつらい立場であったと考えられる。結果的に処分はされなかったものの、彼は狂歌師としてではなく、幕臣として生きることを選択したともいえよう。

その決意として南畝は、学問吟味を受験する。寛政四（一七九二）年に実施された第一回の学問吟味も受験したとされるが、この時は合格者の発表がなかった。そして近藤重蔵も受けた、寛政六年の第二回学問吟味に臨む。結果は御目見以下の御家人としては唯一人、最高の甲科及第者となる。重蔵が丙科及第であったのに対し、いかに南畝が優秀であったかを示す事実である。この学問吟味及第によって南畝は、二年後に支配勘定として取り立てられ、三〇俵の加増を受けて徒の身分を離れる。いわゆる幕臣として出世することとなり、享和元（一八一〇）年には大坂の銅座へ出役し、文化元（一八〇四）年には長崎に赴任する。大坂では幕臣として精勤するとともに、この時すでに高名であった木村兼葭堂や国学者の上田秋成らと交流していることが知られるなど、好古家としての顔も垣間見せている。さらにはこの大坂出役時に、安閑天皇陵から出土したとされる白瑠璃碗の情報に接し、南畝の随筆集である『一話一言』に記述を残している（徳田 二〇二三）。長崎から戻った後も文化五（一八〇五）年には、齢六〇歳にして関東筋川々御普請御用を命ぜられ、百余日にわたって多摩川水系を巡視する任務に従事する。このように南畝はいずれの職務にも精励し、文化六年には宅地を拝領する。南畝は彼

に不平を漏らすこともなく着実に任務を遂行した有能な幕臣の一面をもつ。この幕臣としての表の顔においては、南畝の好古家としての姿はほとんど見えてこない。よって親常や重蔵と同じく南畝の裏の顔、すなわち好古家としての姿を見ていきたい。

まず取り上げる書物は、南畝がまとめた『流観百図』である。この書物は南畝が古器物、珍獣奇鳥、外国や地方の風俗の図などを収集し、貼り込んだ卷子本である。自分自身で所蔵したものだけではなく、知人、友人が所蔵する古器物の絵図を描き写したものが多く記されている。『南畝文庫蔵書目』によれば、本来は正編一〇巻、続編九巻があったとされるが、原本は残されていない（たばこと塩の博物館 二〇二二）。正編は国立国会図書館が所蔵する写本一〇巻により内容を知ることができるが、続編はまとまった所蔵がみられず、天理図書館所蔵する卷子本などにより断片的に内容を知ることができるのである。

この『流観百図』巻六に、蛭川親常の所蔵した「千葉五郎胤道旗図」が掲載されている。「千葉五郎胤道」とは「国分胤道」とも称し、平安時代末から鎌倉時代初期に活躍し、源頼朝から三代実朝まで仕えた武士である。親常は蛭川家の家祖「親直」が、胤道と同じく頼朝に仕えていたことから入手したのかもしれない。この「千葉五郎胤道旗図」は、当時としてはかなり注目を集めた資料であり、松平定信の『集古十種』にも掲載されている。『流観百図』には原寸大で文様と、「国分庄司千葉五郎平朝臣胤道」の文字の輪郭を写し取っている。この図を書写した最後に「寛政甲寅十一月初子得蛭川君所蔵写 杏花園」と記す。この「寛政甲寅」は寛政六（一七九四）年であり、先の第二回学問吟味が同じ年の四

月に実施された年である。この『流観百図』の絵図は、安永年間から寛政年間にかけて南畝が見聞した古器物が掲載されているとされることから、二〇代の頃からすでに古器物への関心を持っていたことが分かる。すなわち、狂歌師、御家人の活動と並行して、好古家としての活動が同時期に始まっていたことになる。さらにいえば学問吟味に及第して幕臣として勤務に精励する傍らも、古器物への興味が全く失われていないといえる。ちなみにこの時、親常は二七歳の御小姓組番士として若き幕閣の一人として活躍しており、一方の南畝は四六歳となっており、学問吟味に及第したとはいえ身分は徒のままであって、幕臣の身分としては大きな開きがあり、職務上において相まみえることはなかったであろう。しかしながら好古家としても交流は、ここでも身分を超えたものであることが指摘できる。

続いて『流観百図』において南畝と重蔵の交流を見ていきたい。先に示した東京大学史料編纂所が所蔵する『近藤重蔵関係資料4-2』に収められている『古物図』には、寛政四（一七九二）年に「三河国渥美郡神戸郷」から出土した銅鐸の絵図が掲載されている。図3に示した通りであり、この図に続いて銅鐸の解釈文が掲載されている。そこには「寛政六（一七九四）年甲寅六月 近藤重蔵識」との記述があり、このことから『古物図』の成立時期が特定されている。次に、『流観百図』巻九「三河国渥美郡堀出銅鐸」を見ると、『古物図』と同じ銅鐸が描かれている。この銅鐸の絵図から少し後ろに「銅鐸堀出記文」が掲載されている。この内容は『古物図』に「近藤重蔵識」と記載された文章と全く同じである。しかしながら『流観百図』にはこの「記文」を書き残した人物は、

「榊原一學源長俊識」とある。「榊原一學（一七三四―一七九八年）」とは「香山」と号した儒学者であり、有職故実の大家としても名高い旗本である。さて、どちらがこの「銅鐸堀出記文」を記述したのであるうか。「榊原一學」の識には年月日が記述されていないため推測することになるが、寛政六年に記された文書として二人の年齢を比較すると近藤重蔵は二四歳であり、榊原一學は六三歳の最晩年を迎えている。何度も記すがこの年には学問吟味が実施され、重蔵も丙科及第であつたにせよ、優秀であつたことには疑いがない。しかしながら一學は老齢の有職故実の大家であり、銅鐸の記述の引用している『続日本紀』『日本後記』『三代実録』に通じていたことは想像に難くない。さらに銅鐸の図を比較すれば、銅鐸の特徴をよく把握している『流観百図』の方が忠実な絵図であるといえる。このように見てくると重蔵が『流観百図』、もしくはその元となつた図を南畝から借用して書写し、「銅鐸堀出記文」に自分の名前を記した可能性が高いと判断しておきたい。

以上のように大田南畝が残した『流観百図』において、蜷川親常、近藤重蔵らとの古物を通じて交流を見ることができると。また、先に「蜷川氏」が所蔵した須恵器を紹介した『群芳社賞奇』も三人の古物を通じて交流を物語る史料である。この史料は文化七（一八一〇）年に「鑑月亭」と名付けられた近藤重蔵宅で行われた古物、あるいは珍物を展観する会の出品記録である。この中には杉田玄白所蔵のエジプトの「ミイラ」や、市川（河）寛斎所蔵の古鏡、所蔵者は記していないが西洋兜などが示されている。この中に「蜷川氏」も須恵器だけにとどまらず、「朝鮮ノ鼓」「長柄橋柱」等を展観している。このような古物会を通じて様々な情報が

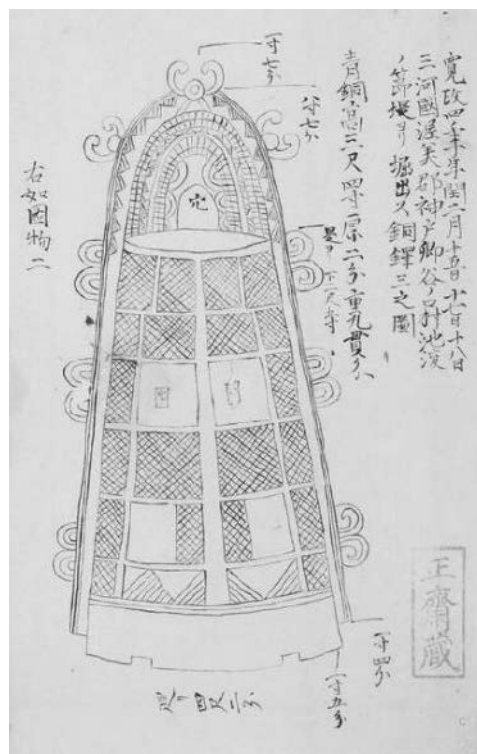
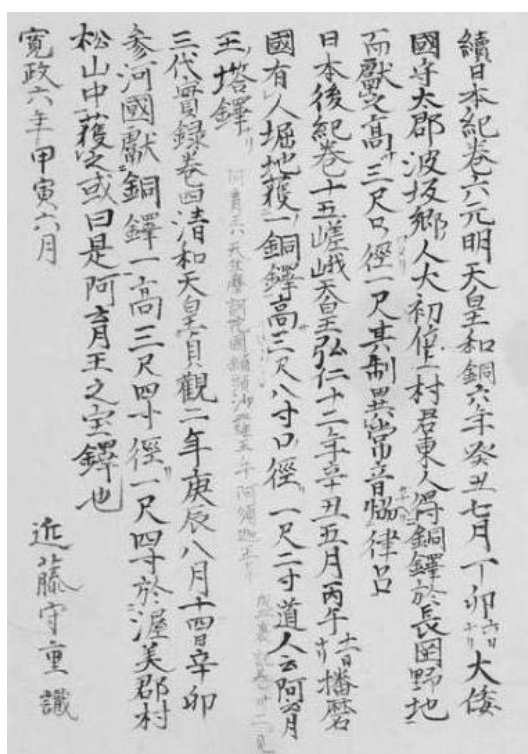


図3 『古物図』所収「銅鐸」「近藤守重識」（東京大学史料編纂所所蔵）

彼らの中に蓄積されていたものであろう。そして『流観百図』にもミイラの図や西洋兜も掲載されていることから、本書は彼らの交流の結実した形として位置づけることができる。

それではこの三人の交流がいつごろから始まったかということになるが、正確にその時期を示す資料はない。改めて三人の生年を比較すると、親常は明和五（一七六八）年生まれ、重蔵は明和八（一七七二）年であり、ほぼ同年代といえよう。一方、南畝は寛延二（一七四九）年の生まれであり、年齢的には二人よりも二回りほど年上ということになる。身分的にはすでに指摘したように親常は五〇〇石の大名旗本であり、重蔵、南畝は一〇〇俵ほどの御家人である。重蔵と南畝の共通点はこの身分的な環境と、互いに第二回の学問吟味に及第してから幕臣としての出世を果たしたことが共通する。それゆえ彼ら二人を結び付けたきっかけは、この寛政六（一七九四）年の学問吟味であり、一つの起点といえよう。終わりにについてももちろん明らかではないが、重蔵が大坂御弓奉行として異動する頃までではなからうか。この時南畝は七〇歳を超え、体力的にも弱っていたことも知られている。このように見てくると三人の交流が最も盛んであった時は、重蔵が御書物奉行を命ぜられた文化五（一八〇八）年ころ、すなわち「鑑月亭」において古物会が開催されたころであろう。また、小野蘭山はこの時期江戸に居住しており、文化七年に逝去するが彼らの活動時期とわずかではあるが一致していることを指摘しておきたい。

おわりに

杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていた石斧について、そしてそこに朱書きされた「蜷川氏」を特定する作業を進めてきた。この「蜷川氏」の候補となる人物として、蘭山と同時期に江戸に居住した「蜷川親常」の可能性を追ってきた。親常は五〇〇石の大名旗本であり、表の顔を幕閣の中核で要職を占める人物である。その一方、裏の顔は古物を集め、本草学や物産学にも興味を持つ好古家である。この好古の世界で近藤重蔵、大田南畝との交流があることが確かめられた。

これまで好古や物産学への興味は木村兼葭堂や木内石亭など、あるいは『聆濤閣集古帖』をまとめた吉田家など大店の旦那衆の活動に注目されてきた。もちろん武士階級としては松平定信が主導した『集古十種』がその最高峰に位置づけられるが、今回扱った旗本階級の人々の活動はあまり知られていなかったといつてよい。その理由としては、近藤重蔵にしろ大田南畝にしろ、北方探検家あるいは狂歌師としての活躍があまりに大きく知られていたために、好古家としての顔が表に出てこなかったことが考えられる。彼らがなぜ古物、あるいは奇石に興味を持ったか、あるいは本草学にも通じる物産に興味を持ったかといえ、表の公務ではなくあくまでも好奇心の世界や、武家故実としての関心であろう。だからこそ身分を超えた交流が可能であったことも指摘できる。今年（二〇二三年）は、南畝が没して二〇〇年である。この記念すべき年に改めて南畝の好古家としての側面を記録しておきたい。

小野蘭山愛蔵石類の含まれていた石斧に朱書きされた「蜷川氏」は、

「蜷川親常」である可能性は高いといえよう。この二人の直接の交流は確かめられていないが、同時期に江戸に居住し、古物や物産学に興味を持っていたことは示すことができたと考えている。そして様々な階級の人々がその身分を超えて、多くの情報を蓄積していった。その情報こそが、明治期以降の近代博物館へと昇華していくエネルギーとしてとらえておきたい。

註

- ① 『群芳社賞奇』西尾市岩瀬文庫所蔵（請求番号84函23号）
 ② 『尚古圖録』早稲田大学図書館所蔵（請求番号チ10 0174）

参考文献

- 小川恭一編著 一九九八『寛政譜以降旗本家百科事典』第四卷 東洋書林
 清野謙次 一九四一「新井白石と近藤正齊（日本考古学人類学史の研究）」
 『古代文化』第二卷第六号 日本古代文化学会
 谷本晃久 二〇一四『近藤重蔵と近藤富蔵——寛政改革の光と影』日本史リ
 ブレット人〇五八 山川出版社
 たばこと塩の博物館 二〇二三「流観百図」「続流観百図」『没後200年 江
 戸の知の巨星 大田南畝の世界』
 徳田誠志・山口卓也・山下大輔 二〇二三「武田科学振興財団杏雨書屋所蔵
 の「小野蘭山愛蔵」石類」『関西大学博物館紀要』第二九号 関西大学博物
 館

徳田誠志 二〇二三「好古家が記録した白瑠璃碗」『いにしえが、好きッ

——近世好古図録の文化誌——』国立歴史民俗博物館

中川泉三 一九三六『石之長者 木内石亭全集』巻四『雲根志』後編「舍利
 石」下郷共済会

中塚栄次郎 一九一八『寛政重脩諸家譜 第七輯』榮進舎出版部